

## 歩けない子の保育方法の一例 (その2)

○富岡 倫子 石原 仁美 森 英子 和多 美知子  
(第二白ゆり保育園) (順正短期大学)

### 1、研究目的

A児は、囑託医診断で、「8ヶ月の早産で生下時の仮死による運動障害、(平成13年10月身体障害者手帳2級) 母親の言う言葉は何とか理解する」という診断が下されていた。しかし、両親は生計維持のために共働きの必要性ありとの福祉事務所よりの要請で、平成12年4月満3歳で入園してきた。そこで、保育園としては、保育者の連携チームを結成し、主として生活習慣の自立と、歩行練習と鉄棒による身体全機能の回復をめざして3年間保育を展開してきた結果、卒園までには軽い補助で健常児にまじり生活できる状態にまで回復することができた。この段階までの経過については第56回保育学会で発表している。このたびは、卒園に際し歩行練習など保護者に家庭生活での対応の仕方・学童保育の必要性などについて話し合い、小学校にA児を送り出して以後のA児をとりまく人的・物的環境の追究とA児の変容について述べる。

### 2、研究方法

昨年に引き続き「よりよい生活習慣が身に付き、自力で立って地面にきちんと踵をつけて短距離でも上手に補助なしで歩くことが出来れば」という願いを込めてよりよい方法を模索、研究を深める。

- (1) 保護者との連携を深め学童保育への参加を実施する。
- (2) 昨年までと同様に保育者の連携チームを作る。
- (3) 下校後、保育園で歩行練習(歩行距離測定も含めて)と鉄棒での後回り100回(回転時間測定)を実施する。
- (4) 夏休み中は毎日保育園に登園して、歩行練習+プールで全身を使つての泳ぎを実施する。
- (5) 週1回岡山駅を中心に繁華街での歩行を継続実施する。(午前9時から12時までの3時間)

### 3、研究経過

○5月20日(火)から保護者の協力により学童保

育に参加することになった。

- 5月21日(水)に小学校の担任及び補助の先生が来園し、これまでの研究経過を報告、学校生活でも出来る範囲での協力を依頼した。
- 学童保育では、鉄棒と、歩行練習を重点的指導項目として実施し、夏休み中は、毎日前記2点にプラスして全身の柔軟性及び特に足の動きに重点をおいた水泳を取り入れた。
- 夏休みもあと一週間となった8月22日に、小学校の担任および補助の先生が再度来園、A児の生き生きとした成長振りに驚かれる。そこで、夏休み中の状況を報告し、今後の協力方法を話し合った。
- 身体発達の状況把握の一貫として足型も継続して毎月採取し検討を加えてきた。
- 11月までは、補助なしで自力で約200m位歩けるようにはなっていたが指1本というような軽い補助がないと鳥の軽い歩みのようなつま先を使つての歩き方になり踵をつけて歩くことが出来なかった。しかし、12月18日に始めて右足を踵までつけて自力で3歩歩くことが出来た。その後、12月末までには、6~7歩右足が踵までついて歩くことが出来るようになった。
- 鉄棒では逆上がり1回、連続後回り100回を自力で昨年度末は20分かけて回っていたが、平成16年1月始めには、5分台で回れるまでに上達してきた。

### 4、研究結果

- (1) 平成15年4月には、小学校に入るという生活環境の変化によって、脚力が一時的に鈍っていることに驚き、5月から保育園での学童保育に参加させることにした。そして再び継続してきた全身・全感覚機能の発達を促すための研究態勢がとれるようになった。
- (2) 学童保育では同学年や1~2年先輩の友達が鉄棒で楽しくスピード競争を取り入れてくれ、プールでのダイナミックな泳ぎ、宿題指導など常に温かい協力が得られたために保育者の

力以上の喜々としたA児の笑顔が見られた。

(A児にとって学童保育という子ども集団はとても意義ある存在だったと改めて痛感した。)

- (3) 夏休み中水泳を重点項目に取り入れたことにより、脚力の発達も促進され、股関節も柔軟になり、歩行にも良い影響がみられた。
- (4) コツコツと弛まず歩行練習をくり返すことによって、3時間という限られた時間内での歩行距離がどんどん延び、歩く姿勢も徐々によくなって歩幅及び速度に変化がみられてきた。  
(下記参照) その上足型にみられるように足裏全体を踏みつける力も強くなった。

昨年引き続き岡山駅西口を起点に週1回繁華街を一步一步地面に両足裏をきちんとつけて歩いた(左手軽い補助で、所要時間いずれも3時間)

4月	往復で約946m
5月	往復で約962m
6月	往復で約1091m
7月	往復で約1091m
8月	往復で約1091m
9月	往復で約1331m
10月	往復で約2000m
11月	往復で約2306m
12月	往復で約3440m
1月	往復で約4000m

- (5) 鉄棒(逆上がり 1回、連続後回り 100回)を毎日繰り返すことによって、回転速度が増すと同時に、鉄棒をする前の体温と回転後の体温に変化が殆ど見られなくなり、安定した動きでの身体機能の回復をみる事が出来た。

その上に体型にも変化がみられ、背骨の湾曲が徐々に矯正されてきて背筋が伸び同時に歩幅も大きくなってきている。

- (6) また、学童保育を通して同年齢の友だちとの楽しい競争などのような刺激を受けて、仲間作りも積極的にできるようになり、社会性を身につけてきていることが確認出来た。同時に豊かな言語発達も見られるようになった。

## 5、まとめ

- (1) この研究を通して、A児から多くのことを学ぶことができた。健康児が瞬間瞬間に脱皮していく一コマ一コマをA児はスローモーション画像を通して保育者が今まで気にもとめていなかったり見落としていた動きの些細な一場面一場面の脱皮の様子を画像の中に写し出してくれている。

例えば、「こんなところが坂になっていたのかと思わず振り返るゆるやかな傾斜面」では0歳児が歩み始めた当所味わっているであろう歩みの難しさが見られ、「階段の昇り降りの足どりの徐々に変化していく動きの克明な様子」を見ることが出来たり、「子ども靴」の靴裏の材料の違いによる固さの違いや踵などの高さによる微妙な違いが、歩行を極度に妨げたり助長していることなどなど年齢発達上に大切な細かな心配りが必要な場面を改めて知った。

(現在の子ども靴にはキャラクターなどのついた子どもの目を楽しませるものが多く売られていて、「子どもの発達を助長する」ことが如何に疎んじられているかなどを改めて痛感した)

- (2) また、保育園という0歳から就学前児、そして、学童までがいる子どもの大集団の力がA児にとって、とても大切な原動力になったこと。
- (3) そして、毎日のコツコツとした繰り返しの動きの積み重ねが、如何に大切であるかなどを改めて痛感した。
- (4) その上に、保護者との連携だけでなく小学校や地域社会との連携ができたことでより効果的に研究を進めることが出来た。

## 6、今後の課題

上記のようにして小学校1年生になったA児の歩行が一応完成に向けて着々と効果をあげてきている。しかし、定着するまでには、あと一年は今まで同様、たゆみない努力をA児と共に歩んで行き、見守り続ける必要があると思われる。